

## 阿波の職人達とその生き方

大学開放実践センター・教授(職業能力開発) **もり 森** **かず お 和夫**

## 阿波の国と文化

私はこのコラムで徳島在住の職人の方々と面談し、その人となり、生き方、作品などを紹介してきた。阿波という地方がもたらす文化というものに注目しながら、職人の生きざまを考えてみよう。四国、阿波の国は京都、奈良、大阪という、かつての都を目前にした位置にある。この阿波に暮らしてみると、外から見るのとは異なった風土があることに気づく。阿波はゆったりと流れる時と、伝統と文化の息づく歴史の町でもある。職人とは元来、このような文化と無縁では語ることはできないと思う。

## 意外にも……創造、発想転換

私は始めに徳島県中部の山川町在住の阿波和紙職人の藤森さんを訪ねた。和紙製造という存在そのものが問われている状況下であって海外のマーケットに注目することや、素材としての和紙の価値を再構成することで、新たな販路を見いだそうとする姿がそこにはあった。考えてみれば、紙という素材の固定観念を取り除くことが新しい紙の概念を創り出すことでもあったのである。それは「紙漉き職人についてどう思いますか」というインタビューでの第一声が全てを言い尽くしている。和紙製造の基本的な原理、技術は変わらずとも、「和紙の概念を変えると、こうも見方が変わってしまうものか」と考えずにはいられない。また、そのような発想の仕方のできる職人をこの時代に、この場所に生きていることに尊敬の念を抱く。



続いて、阿波伝統の藍染め職人である古庄さんを徳島市の工房に訪ねた。ここでも既存の藍染めに対する概念を打ち破ろうとする姿を見た。注染ぞめという方法で一般的な藍染めの工程とは全く異なる。型を使って幾重にも藍を注ぐことで染めが進行する。古庄さんが再現した「絹の藍染め」もそうだが、「染め」の技術と作品に対する思い入れ、作品の使われ方、作品の価値への認識はとても大事なことに映った。つまり、伝統は時代に合わせて変化しているのであり、伝統はそのままの姿で存在し続けるも

のではない。一般に社会の認識は「職人は伝統を守る」と考えがちだが、少なくとも阿波の職人達は「伝統を築くもの」、「伝統を変えていくもの」と考えるべきなのだ。

さて、これはステンレス溶接技能者である大岩さんと出会ったことで確信となった。板野郡北島町にある工場である。「新しい仕事は聞くとこがない。自分で考え、自分でやる。これで自分の技術を伸ばしてきた」という。職人達は常に自らを革新し、変革の中に身を置いている。モデルや模範はないのである。自らが切り拓いて創り出す以外に道はないのだ。これが職人達の生きる術であり、唯一の道でもあったのだ。また、職人は自然に逆らわない生き方を選ぶ。自然界の道理をあるがままに受けとめ、利用し、自分を合わせることで生きる道を得ている。先端技術を応用した機械加工の職人だからではなく、今を生きる職人だからそうなのだ。



## 職人論の奥の深さを楽しむ

これまで、職人に関して小論を書いてきたが、今回の「阿波の職人シリーズ」は考え方の幅を広げてくれた。例えば、「職人仕事の中心は人である」と書いたが、「職人仕事の中心は人の暮らしと生活が基盤にある」と考えるようになった。「職人は物の道理・自然の流れに忠実」と書いたが、「職人は物の道理・自然の流れを受けとめて自分を合わせ、利用する」と解釈することにした。

考えてみれば、阿波の国はベンチャーの国でもある。新しい取り組み、工夫と実践展開力に優れる、この地域のエネルギーはどこからくるのだろうか。このエネルギーがあればこそ、阿波の職人の生活を支えてきたのだと思う。……私は、この謎に答えを出すのは先にしたいと思う。実はもう少し、各地を探訪し、そして職人と語った後に結論を出しても遅くはないのだ。いや、それを楽しみにしたいと考えようになった。